

『ハムレット』における差異について

竹 永 雄 二

(英米文学研究室)

はじめに

見せ掛けと実態というシェイクスピアの劇全体に共通する一つのテーマは、言葉を換えれば「差異」の問題ということになる。さまざまな登場人物、場面、劇的問題の設定は差異を作り出すことであるともいえる。そして観客、読者は多様で複雑な差異を理解し、楽しむことを求められる。

「差異」は脱構築批評の重要な批評用語である。一つの言葉に絶対的な意味があるのではなく、対極を為す言葉との差異の中から意味が生まれるという考え方である。しかし、本論で差異という言葉を使う時、厳密に規定された意味で使っているのではない。対照、相違、コントラストなどとはほぼ同じ意味である。敢えてこだわるとすれば、テキストを堅固な構造物としてではなく、繊細な織物としての見方、ゆえに批評とは、部分が有機的統一体を作り上げるメカニズムを証明することではなく、織物の一つ一つの糸がどのようにより合わさっているかを示すことであるという脱構築批評の考え方に共鳴するからである。そしてこのような目的のためには「差異」は有効な一つの視点であると思える。

伝統的な見せ掛けと実体という視点とはほぼ重なり合う現代批評の「差異」という言葉を使って、どれくらいテキストの複雑な糸の織り込みが見えてくるかを探ってみたい。

1. オフィーリアの言葉が示す差異

オフィーリアは無垢で清らかな心を持つ女性であり、劇の中では中立的な立場を取っている。彼女の目には、彼女を取り巻く人間達の歪みが有りの儘に映し出されていると思われるので、まず、彼女の言葉に注目してみよう。

彼女はハムレットに残酷な言葉を浴びせかけられ、次のような言葉で彼女の嘆きを表している。そこには過去の理想的王子であったハムレットと、変わり果てた狂乱の中にある現在のハムレットとの差異が印象的に示されている。

Ophelia: O, what a noble mind is here o'erthrown!

The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword,

The expectation and rose of the fair state,

The glass of fashion and the mould of form,
Th'observ'd of all observers, quite, quite down! (3. 1. 149-153)

彼女の記憶に刻み込まれた過去のハムレットは、美しさ、礼節、学芸、武術を完璧に備えた理想の人間像であった。彼女が今日の前にしているのは、それらすべてを喪失した狂気のハムレットである。此処には、理想と現実、過去と現在といった基本的差異が示されている。

しかし、実際のところは彼女はハムレットの狂気が偽装であることに気が付いていないので、彼女の言葉は現実のハムレットの真実を表しているわけではない。逆に彼女が本当に狂気になってしまった時、彼女の狂気という言葉は正常を装った見せ掛けの下の実体を言い当てている。

Ophelia: [To Claudius] There's fennel for you, and colum-
bines. [To Gertrude] There's rue for you, and here's
some for me. We may call it herb of grace a' Sundays. You
may wear your rue with a difference. There's a daisy. I
would give you some violets, but they wither'd all when
my father died. (4. 5. 178-183)

彼女の花言葉は、兄レアティーズが言うように「狂気の中の教訓」(document in madness)を持っている。彼女がクローディアスに渡した花は「ういきょう」と「おだまき草」で、それぞれ追従と恩知らずを象徴する花である。追従とは、甘い言葉で相手を自分の思い通り操る彼の巧みな話術を指しているし、恩知らずは当然彼の兄殺しを指していると思われる。彼女がガートルードに渡した花はヘルシーダで、それは悲しみと後悔を象徴する花である。それはオフィーリア自身のための花でもあるが、同じ花でもオフィーリアとガートルードでは意味合いが異なると彼女は言っている。つまり、ガートルードの場合は、犯した罪、過ちに対する後悔を意味し、オフィーリアの場合は、彼女を取り巻く世界の罪により、それが父であれハムレットであれ、愛するものを喪失してしまったという純粋な悲しみを意味していると思われる。皮肉なことに、オフィーリアの狂気という言葉が隠された実体を映し出し、正常を装う彼女の回りの現実世界は偽りだけしか表していない。

狂気は対象間の差異を認識する能力の欠如、または狂いからきている。しかし、シェイクスピアは狂気のオフィーリアにこの差異を識別する能力を与えている。彼女が与える花の持つ象徴的意味により、贈られる側の実態と、その差異が明らかにされる。

2. ハムレットの言葉が示す差異

ハムレットの言葉、特に狂気という言葉は現実に存在する差異を解体する方向に向かう。

国王も乞食も死んでしまえば等しく蛆虫に食われる。蛆虫にとっては同じ料理で、現世の権力者と下層民との差異など解体してしまう。

Hamlet: Not where he eats, but where 'a is eaten; a certain
convocation of political worms are e'en at him. Your worm

is your only emperor for diet: we fat all creatures else to fat us, and we fat ourselves for maggots; your fat king and your lean beggar is but variable service, two dishes, but to one tabel—-that's the end. (4. 3. 19-24)

ポローニアスの死体はどこだとクロードィアスに問われ、ハムレットはこのように答えている。彼は夕食の席に着いているが、自分が食べる夕食ではなく、逆に、食べられる夕食だ。つまり、蛆虫どもが彼を食っているのだ。人間は人間の食料とするために他の動物を太らす。次に太った自分の体を蛆虫の餌として提供する。だとすると、脂肪太りの王様も痩せた乞食も、一つのテーブルに並べられる二種類の料理にすぎない。このようなハムレットの死に対する軽口、冗舌には、虚偽の国王クロードィアスへの彼の憎しみが込められている。ハムレットは、本当はクロードィアスを蛆虫への料理としたかったのであるが、材料を間違ってしまったのである。

彼は叔父クロードィアスを母と呼ぶ。夫婦は一心同体だから。罪を犯しているということでは二人とも同じである。

Hamlet: My mother: father and mother is man and wife, man and wife is one flesh —-so, my mother. . . (4. 3. 49-50)

ハムレットの言葉は、表面的には対象間の識別能力の欠如を示す狂気という言葉として聞こえるが、真相を知るものには、つまり観客、読者、さらには罪を意識するクロードィアスには、はっとするような真理を暗示している。つまり、ハムレットの言葉、狂気を装った言葉はドラマティック・アイロニーとなっている。

同じような例は、ハムレットのポローニアスとの対話の中にも見られる。

Polonius: Do you know me, my lord?

Hamlet: Excellent well, you are a fishmonger. (2. 2. 173-4)

自分は誰だか分かるかとポローニアスに問われて、売春宿の主人に間違いないとハムレットは答えている。国家の重臣ではあっても、娘オフィーリアを囮にしてハムレットの心の中を探ろうとするポローニアスは、女を手段とする売春宿の主人と大差ない。ここでも、ハムレットの言葉は、狂気を装いながら、国王のスパイである相手の実体を鋭く突いている。

ハムレットにとってガートルードもオフィーリアも個別的な意味を失って、男にとっての生殖の対象としての総称的な女になってしまう。罪に陥ってしまうか弱き存在としての女となる。²⁾

Frailty, thy name is woman! (1. 2. 146)

「尼寺へ行け」というハムレットのオフィーリアに対する厳しい言葉は、彼にとって特別の存在であったオフィーリアとガートルードの差異が解体したことを示している。ハムレットはオフィーリアの延長線上にガートルードを見ている。そして彼女たちは根源的には、人間の楽園

喪失の原因となったイヴと繋がる。ゆえに、ハムレットのオフィーリアに対する攻撃は、彼女の無垢の装いの下に隠れた罪、女としての潜在能力への無自覚さへ向けられている。

Hamlet: I have heard of your paintings, well enough. God
hath given you one face, and you make yourselves another.
You jig and amble, and you lisp, you nickname God's
creatures and make your wantonness your ignorance.
Go to, I'll no more on't, it hath made me mad. (3. 2. 141-5)

神が与えてくれた顔に化粧をして別の顔を作り、気取った歩き方、話し方をして男を誘う。だが過ちを犯しても無邪気を装う。この罪に対する無自覚さが自分を発狂させたのだと、ハムレットはここではっきりと狂気の原因を述べている。

フロイト的解釈をすれば、劇中劇の合間のハムレットとオフィーリアの会話の中に出てくる 'nothing' という言葉は、『ハムレット』全体の解釈に繋がる重要な象徴的意味を持つように思われる。

Hamlet: Lady, shall I lie in your lap?
Ophelia: No, my lord.
[Hamlet: I mean, my head upon your lap?
Ophelia: Ay, my lord.]
Hamlet: Do you think I mean country matters?
Ophelia: I think nothing, my lord.
Hamlet: That's fair thought to lie between maids' legs.
Ophelia: What is, my lord?
Hamlet: Nothing. (3. 2. 105-113)

「無」は第一に男性にあるものが女性の膝の間には無いこと、つまり、男性と女性の性的差異を表す。第二にそこは空洞で、男性を区別なく飲み込む場所、男性の個別的アイデンティティーが喪失される場所を表している。そしてこのような病理的女性観が、ハムレットの虚無的世界観を作り出す根源的原因になっているように思われる。³⁾

さらに、ハムレットの言葉に示された差異の解体は、彼を取り巻く人間のみならず、彼を取り巻く世界、宇宙へと広がっていく。城は野望によって真実を抹殺する雑草の生い茂る転落の庭、真実を押し込める牢獄となる。墓場は、現世のすべての差異を解体し、命あるものすべてを等しく塵に変える場となる。天、地、人間、動物間の序列とその差異は解体し、すべては等しく塵と見える。

Hamlet: What [a] piece of work is
a man, how noble in reason, how infinite in faculties, in
form and moving, how express and admirable in action,
how like an angel in apprehension, how like a god! the

beauty of the world; the paragon of animals; and yet to me
what is this quintessence of dust? (2. 3. 297–302)

自然の傑作である人間，高貴な理性，無限の能力，素晴らしい行動力，天使に等しき，神に等しき理解力を持つ人間，この世の花，万物の霊長である人間も，今のハムレットにはただの塵にしか見えない。⁴⁾人間と動物間の差異は完全に解体している。このような彼の精神状態の直接の原因は，父の死（叔父による暗殺）と母の早すぎる再婚にあると思われるが，彼の言葉はそれだけでは説明しきれない深い虚無感を示している。彼は父の暗殺を知る前から，人間の肉体を罪に汚染されたものと見做し，この世の生の営みはただ不正と汚れに塗れることにすぎないと見做しているからである。このような人間観は，一言で言えば，原罪観ということではないだろうか。問題は，彼自身の個別的な，特殊なことではなくて，人間すべてに共通する，普遍的なことではないか，表に現われようが，現われまいが，罪はすべての人間に蔓延しているのではないか，このような認識が彼の虚無感に繋がっているように思える。特定の対象，父を暗殺したクローディアスに対する復讐，そのような叔父と再婚した母に対する糾弾だけではすまない根源的な問題を彼は意識しているのではないだろうか。

3. 逆に，ハムレットが差異を強く主張する場合

劇の冒頭のクローディアスの華やかな戴冠式において，ハムレットは喪服を着て登場し，他の宮廷人とは感情的差異があることを間接的に主張する。そして，叔父の現王クローディアスから甥であり，息子よと呼ばれて，息子扱いされることを強く拒否している。

King:

But now, my cousin Hamlet, and my son—

Hamlet: [Aside] A little more than kin, and less than kind. (1. 2. 64–5)

ハムレットには現実の秩序，あるいは政治的構造は偽りのフィクションとしか映らない。父の死後，彼の母と結婚して王位に就いた現王クローディアスの，わが甥であり，わが息子よという呼び掛けは，繊細な感受性を持つハムレットにはとても受け入れがたいものである。kin（親族）と kind（肉親）は文字が一つ違うだけの言葉であるが，その間には歴然とした意味の差異が存在するのである。以上となっても以下であるという比較級表現が，区別にこだわるハムレットの頑な感情を示している。そこには，クローディアスの言葉巧みな懐柔に対するハムレットの抵抗が示されている。

ハムレットが母ガートルードと対峙する場は，冒頭の亡霊の出現と同じように，劇全体の中で最も緊迫した場面となっている。⁵⁾父ハムレットとクローディアスの並んで壁に掛けてある肖像画を前にして，外面的にも，内面的にも，その他すべての面において，二人の間には歴然とした差異があることを，母に強く主張する。その差が認識できなかった，またはその序列を逆転させたように見える彼女の行動が，ハムレットには不可解であり，彼の激しい苦悩の原因となっている。

Hamlet: Look here upon this picture, and on this,
 The counterfeit presentment of two brothers.
 See what a grace was seated on this brow:
 Hyperion's curls, the front of Jove himself,
 An eye like Mars, to threaten and command,
 A station like the herald Mercury
 New lighted on a [heaven-]kissing hill,
 A combination and a form indeed,
 Where every god did seem to set his seal
 To give the world assurance of a man.
 This was your husband. Look you now what follows:
 Here is your husband, like a mildewed ear,
 Blasting his wholesome brother. (3. 4. 53-65)

ハイペリオンの黄金の巻毛、ジョブの額、マルスの鋭い視線、使者マーキュリーのような凜凜しい姿勢というように、神話の神々を引き合いに出して、父ハムレットの高貴さ、美しさが強調されている。これに比べると、クロードィアスはほとんど描写にも値しないというのだろうか、ただ虫のついた麦穂と例えられているのみである。父のギリシア的理想美に対してクロードィアスは内に潜伏する汚染、害毒として対比されている。この肖像画に明示された二人の差異は、感情さえあれば、感情が無くても目があれば、視覚が無くても感情があれば、聴覚さえあれば、嗅覚さえあれば、五感のひとつかかけらさえあれば見分けられることであるとして、ハムレットは母のクロードィアスとの再婚を厳しく責めている。

4. 差異によりハムレットが自分に欠如しているものを痛感する場合

依頼を受けて、トロイ落城の場を語る役者の見事な語りにハムレットは涙する。遠い過去の世界の、自分とはまったく無関係な出来事に身も心も没入して演ずる役者と、父を殺されながら復讐を遅延している自分自身との差異をハムレットは痛感する。

Hamlet:
 Yet I,
 A dull and muddy-mettled rascal, peak
 Like John-a-dreams, unpregnant of my cause,
 And can say nothing; no, not for a king,
 Upon whose property and most dear life
 A damn'd defeat was made. Am I a coward? (2. 2. 546-51)

ハムレットにとっては、現実という見せ掛けによって隠蔽された真相を表に表してくれるのは唯一演劇である。彼は役者は「時代の縮図、年代記」であると言い切っている。劇中劇『ゴンザゴ殺し』ほどは注目されていないが、ハムレットが自ら口火を切り、旅回りの役者の一人

が後を続けた「プライム王の最期」の件に深く心を動かしている。それはトロイ戦争のクライマックスの部分である。木馬から夜陰に乗じて姿を現し、悪魔のごとく残虐に老王プライムに襲いかかる猛将ピラス。老いたるといえど敢然と敵に立ち向かおうとするプライム。炎を上げて燃え、崩れ落ちる城の中で、夫の最期を知り悲痛の叫びを上げるヘキュバ。このような悲劇の心を揺さぶる激しい情感は、ハムレットを取り巻く現実になんと欠落していることだろう。刃を交わすこと無く、毒殺するという狡猾な手段、夫の喪もあけやらぬ間に、夫を殺害した張本人と再婚してしまう母。現実の偽りの安定の下に葬り去られようとしている真相。ハムレットがこの悲劇に涙するとき、単なる自分自身の行動力の欠如だけではなく、悲劇と現実の落差が、悲劇になることを阻止されている真相が、彼の心の中で意識されていたのではないだろうか。

もう一つの例は、まったく価値の無い土地を占領するために、数十万の兵を率いてポーランドへと進軍する若きノルウェイ王子フォーティンブラスを見た時のハムレットの独白の中に見られる。彼の凜凜しい姿を見て、口先ばかりで行動力に欠ける自分の腑甲斐なさを痛感し、ハムレットはこれからはどんなことでもすると、復讐への意欲をかき立てる。

Hamlet:

Witness this army of such mass and charge,
Led by a delicate and tender prince,
Whose spirit with divine ambition puff'd
Makes mouths at the invisible event,
Exposing what is mortal and unsure
To all that fortune, death, and danger dare,
Even for an egg-shell. (4. 4. 47-53)

未知なるもの、予測がつかないものにも敢然と立ち向かい、卵の殻に過ぎない事にも敢えて命を懸けようとするフォーティンブラスの行動力がハムレットを強く刺激している。冒頭で噂として伝えられた彼のデンマークへの侵攻の準備は、クローディアスの巧みな外交的手腕により阻止されてしまう。ゆえにここでのポーランド侵攻は本来の目的とは異なるものである。しかしそこには、先王ハムレットとの一騎打ちに破れ、命を失い、国土の一部も失った父の無念を晴らそうとする息子の固い決意が感じられる。彼が劇中に登場してくるのは、劇の最後の場面であるが、いつも遠くに進軍の足音が聞こえるようで、ハムレットとは対照的に、父に託された息子の役割を模範的に果たした王子のように見える。劇の最後で、ハムレットにより、次期デンマーク王に指名されることになる。

5. その他の登場人物、劇の場面に現われた差異

クローディアスとガートルードには見せ掛けと実態の差異が最も顕著に現われている。美しく装われた外面と罪に汚れた内面への自覚は分裂した犯罪者の心理を表している。

King: [Aside.] O, 'tis too true!

How smart a lash that speech doth give my conscience!

The harlot's cheek, beautied with plast'ring art,
 Is not more ugly to the thing that helps it
 Than is my deed to my most painted word .
 O heavy burthen! (3. 1. 48-53)

結果を得るためには卑怯な手段も止むを得ないというポローニアスの言葉がクロードィアスの良心を激しく鞭打っている。厚化粧の下の娼婦の醜い頬も、きらびやかな言葉で隠蔽された自分の行為の醜悪さに比べれば、まだましであるというクロードィアスのこの脇台詞には、彼の深い罪悪感が表されている。彼は野望の達成に酔い痴れているわけでもなく、罪を重ねることにより罪悪感が麻痺しているわけでもない。罪の悪臭が天まで臭うことをはっきり意識している。神の裁きを恐れ、許しを請おうとする極めて人間的一面を示したりもする。しかし、一方では、手に入れた物に強く執着し、それを脅かす邪魔者を、あらゆる手段を使って排除しようとする。

ポローニアスは冗舌で滑稽な印象を与えるが、一方では、世事全般に渡って知識と知恵を備えた老獪な政治家である。旅立つ息子レアティーズへの彼の助言は耳を傾けさせるものがある。人間関係においては、通常はすべてに渡って控えめに、だがいざという時は自己に忠実に思い切って行動せよという助言である。調和を第一としながらも自己の独自性、他の者とは異なる本当の自分自身を大事にせよということである。

また彼は文化人でもある。大学時代に演劇活動をしていたと自ら言っているように、彼は演劇通であり、演劇を非常に細かく分類してみせる。

Polonius: The best actors in the world, either for tragedy,
 comedy, history, pastral, pastoral-comical, historical-
 pastoral, [tragical-historical, tragical-comical-historical-
 pastoral], scene individable, or poem unlimited; (2. 2. 385-88)

皮肉なことに自分の知恵が仇となって、鼠と罵倒され、誤って刺し殺されてしまった彼の悲劇は、彼が挙げた悲劇の分類のどれに当たるのだろうか。

レアティーズが父の復讐のために取る行動はハムレットとは極めて対照的である。祈りを捧げるクロードィアスに対して、ハムレットは一旦抜いた剣をまた鞘に戻してしまう。罪を祈りで洗い浄めた瞬間に殺すことは、地獄に送り込むことにならないと判断したからである。一方、レアティーズは復讐の場がどんな所だろうが、どんな卑劣な手段を使おうが一切構わず、ただ復讐を成し遂げればそれでいいと考える。

Laertes: To cut his throat i'th'church. (4. 7. 127)

復讐の決意が鈍ってないかどうかクロードィアスに問われて、彼は神聖な教会の中でも父を殺した相手、ハムレットの喉をかき切ってやると断言している。レアティーズは『ハムレット』の中で、父を殺された三人の息子の一人である。そして彼らの中で復讐に対して最も単純な行動を取る。ハムレットの復讐への複雑な対応と対置されていることは明らかである。

補足的なことであるが、第一幕は場面と人物設定において、劇全体の展開を象徴するような差異が見られ興味深い。真冬の真夜中の城外の見張り台、そして亡霊の出現、一転して城内の華やかな戴冠式、見せ掛けと実態の差異を表す印象的な場面設定となっている。人物設定では、父から子へのメッセージの中に差異が観察される。ポローニアスから、旅立つ息子レアティーズへの助言。義理の父クロードィアスから王位継承者であることを宣言されたハムレット。父の亡霊からクロードィアスに暗殺されたという真相を告げられ、復讐を託されたハムレット。父の無念を晴らそうとデンマークに対する戦争の準備をするノルウェイ王子フォーティンブラス。ハムレットの場合は極めて異常な親子関係であり、フォーティンブラスは尊に上るだけで、一度も場面に登場することはないが、三組の親子関係が対照的に表されている。そして劇全体は、父を殺された三組の息子達の物語とも言える。

6. 神の業と人間の行為の差異

ハムレットが最終的に到達した認識は神の業と人間の行為の差異である。人間が行なった荒削りの行為に最終的な仕上げをしてくれるのは神であるという認識である。

Hamlet: —let us know
 Our indiscretion sometime serves us well
 When our deep plots do pall, and that should learn us
 There's a divinity that shapes our ends,
 Rough-hew them how we will—— (5. 2. 7-11)

考えに考えた周到な計略がまったく無意味に終わるかと思えば、逆に無分別な行為が幸いすることもある。だとすると、どんなに我々が荒けつりをしようと、最後の仕上げをしてくれるのは神ではないだろうか、意外な展開から窮地を脱し、デンマークに生還したハムレットはどのようにホレイションに述べている。意外な展開というのは、イギリスへの航海の途中、海賊船に襲われたということが、クロードィアスが画策したイギリスでの処刑からハムレットを救ってくれたことである。そしてこの予測しがたいことの直接的経験が、ハムレットに、神の業と人間の行為の差異を認識させ、すべてを神に委ねようという気持ちにさせたといえる。⁶⁾ 劇の最後の場面で、宮廷でのレアティーズとの剣の試合を申し込まれた時、何か罠が仕組まれているのではないかと心配するホレイションを振り切って、ハムレットはすべてを覚悟し、平静な気持ちで王の前でのレアティーズとの剣の試合に臨む。確かに罠は仕組まれていた。レアティーズが使う剣は先止めがしてない剣であること、その剣先に塗られた猛毒、さらに喉を潤すために用意された毒薬を入れたワイン。このような三重の差異をつけて、彼らはハムレットを死に追いやりとしたのである。しかし結果は、思わぬ偶然により、彼らは自ら仕組んだ罠にはまってしまうことになる。剣が入れ替わって、毒を塗った剣にレアティーズは刺されてしまう。ガートルードがワインを飲む。罠が暴露され、毒を塗った剣でクロードィアスも刺され、さらに毒を盛ったワインをハムレットに飲まされて息絶えるのである。このような結末は、まさに人間の荒削りな行為と神の仕上げとの差異を示しているのではなからうか。

結 び

『ハムレット』について何か新しい解釈を試みようと意図したものではない。脱構築批評の基本的な概念であり、批評用語である「差異」が、見せ掛けと実態というシェイクスピアの劇作品の基本的な主題を分析する有効な手段となるのではと判断し、ここでは、この難解な作品の特色をできるだけ明らかにし、どれだけ客観的な言葉で説明しうるかを試みてみた。主人公ハムレットの複雑な感受性のみが注目され、神秘化される傾向があるが、それは彼を取り囲む人物、出来事との相関関係と、その差異の中でより際立ったものになっていることが明らかになるように思う。

notes

本文中の引用はすべて以下の版による。ページ数は略す。

Susanne L. Wofford ed., *Hamlet* (Boston and New York: Bedford Books of St. Martin's Press, 1994) なお、この版は、作品『ハムレット』と『ハムレット』に関する現代批評、フェミニスト批評、心理分析批評、脱構築批評、マルキスト批評、新歴史批評の概説と、それぞれの具体的実践例としての研究論文の二部構成となっている。『ハムレット』が現代批評でどのように解釈されているかを知るには非常に有益なテキストである。

1) 脱構築批評を理解するために以下の文献を参照した。

David Lodge ed., *Modern Criticism and Theory* (London and New York: Longman, 1988) J. カラー著、富山太佳夫・折島正司訳、『ディコンストラクション』(東京、岩波書店、1985)

ラマーン・セルデン著、鈴木良平訳、『現代の文学批評』(東京、彩流社、1994)

2) Janet Adelman, "Man and Wife is One Flesh": *Hamlet* and the Confrontation with the Maternal Body, Wofford ed., *op. cit.*, pp. 256-82

3) ショウォルターは、女性批評の立場から、この部分の 'nothing' に注目して、オフィーリアを0の物語とし、以下次のように述べている。

'Ophelia's story becomes the Story of 0—the zero, the empty circle or mystery of feminine difference, the cipher of female sexuality to be deciphered by feminist interpretation.' Elaine Showalter, 'Representing Ophelia: Women, Madness, and the Responsibilities of Feminist Criticism', Wofford ed., *op. cit.*, p. 222

また、イーグルトンは、この部分の 'nothing' ではないが、マルキスト批評の立場から、『オセロー』、『ハムレット』、『コリオレーナス』の三つの作品の中の「無」という言葉に注目し、比較・対照しながら、それぞれの作品の「無」の意味を考察している。そして、ハムレットは存在の「本質」の無い、ただの「無」であると言っている。テリー・イーグルトン著、大橋洋一訳、『シェイクスピア』(東京、平凡社、1992) 第4章

4) 斎藤勇氏は、最後の一文を除くハムレットのこの言葉をイギリス・ルネッサンスの新しいヒューマニズムを表す具体例として引用されているが、重要なのは最後の一文であり、ハムレットにおいては、人間の尊厳に対する自信は完全に解体している。

斎藤勇著、『イギリス文学史』(東京、研究社、1927) p. 66

5) 従来ハムレットの復讐の遅延を問題とする見方では、直前のクロードィアスの祈りの場に重要性が置かれたが、アデルマンは『ハムレット』の中で、ハムレットの母との対峙の場面が最も重要な意味を持ち、これと比べるなら前述の場面は単なる「インターロード」に過ぎないと言っている。Adelman, *op. cit.*, pp. 275-6

6) Bertram Joseph, *The theme*, reprinted in *Twentieth Century Interpretations of Hamlet* ed. by David Brevinton (New Jersey: Prentice-Hall, 1968) p. 99

(1994年10月11日受理)